

地域畜産振興部門

島根県雲南市

木次乳業有限会社

(代表：代表取締役 佐藤貞之)

自然と共生・地域と共存
(symbiosis)



木次乳業有限会社のみなさん

木次乳業有限会社は、島根県雲南市（旧大原郡木次町）にある乳業会社で、31戸の生産者から日量15tを集乳している。同社は、旧木次町内に豊富にある畦草や下草を利用できる小規模な酪農に活路を見いだしていこうとする生産者の出現を契機に、生産された生乳の集乳・処理・販売を一手に引き受け、地域酪農家の経済的な支柱として昭和37年に設立された。当初は酪農組合として計画されたが、牛乳の処理まで自ら行う必要に迫られ、会社形態でスタートした。そのため、同社の定款は農協のそれに近い内容となっており、『酪農家の共同体』としての内実を持った会社である。そのため、同社の活動には、一般的な「乳業会社」とは趣を異にする点がみられる。

同社は、地域の農業従事者に対して独立自営の自覚を持たせ、「個の確立」を図り、それぞれが自立することを重視している。その中で必要なところだけ「ふところに入り込まない程度」に協同し、助け合いながらも「自分のため」という意識を守りながら行っていくことが、結果的には「他利が自利」につながるとの考えのもとに、「有機循環農法」を基本としつつ、個の活動と個を補完する「ゆるやかな共同体」の形成を通じた地域自給の確立を目指している。

このために同社が取り組んでいる特徴的な活動としては、第1に低温殺菌牛乳の生産があげられる。昭和53年に日本で初めて低温殺菌牛乳「木次パステライズ牛乳」の市販化を実現するとともに、生産のために必要な非遺伝子組み換え飼料を利用することの徹底と、衛生面に重点を置いた営農指導を実施している。同牛乳は、長年のPR活動も相まって、他の牛乳に比べて高価格で販売されており、結果として生産者の生産意欲を向上させている。

第2に同地域では、生産者が中心となって、多種多様なグループ・組織が形成され活動しているが、その活動を支えるための実践の場を同社が提供していることである。主な活動として、酪農家によるチーズの生産組合、酪農を営む女性による勉強会、学校給食へ地域の食材を提供するためのグループなどがある。これらの活動を通じ、生産者の意識啓発につなげている。

その他にも、牛乳の売り上げの一部をヘルパー制度に補助して利用料を抑え、利用を促進したり、同社が管内の生産者のとりまとめ役を担って、稲わらとたい肥の交換システムを早くから確立したりするなど、同社が率先して実施してきたことがあげられる。

かつて、全国に数多く存在していた地域の共同体は、農業の近代化、過疎化、高齢化の中で機能しなくなり、その多くは姿を消しつつある。同社も、決して恵まれた条件にあるとはいえないが、同社の活動が中心となり、有機循環農業という考えと酪農業が核となり、多種多様なグループ、組織が構成され、それぞれが「有機」的に連携を図ることで、地域の共同体が維持されている。1980年以降の酪農家戸数の推移をみると、島根県全体が20%に減少しているのに対し、旧木次町は50%に留まっていることから、同社の取り組みは多くの地域で参考になり得る事例である。

木次乳業本社屋

本社は雲南市（旧木次町）にある。



管内の酪農家

低温殺菌牛乳を生産しているため、清掃が行き届いている。



日登牧場

中山間地でできる畜産の実証展示の場として、管内の生産者が出資して設立した。



ブラウンスイスを導入

日登牧場では、今後の山間酪農を模索するためにブラウンスイスを導入、山地放牧をしている。



社員食堂の食材も自給

「自らが健康でないとまともな食料は供給できない」の理念のもと、社員自らが米や野菜を生産しており、その活動ノウハウは管内の生産者グループ活動に生かされている。なお、生産された食材は社員食堂で利用している。



木次パステライズ牛乳

昭和53年に、わが国で初めて本格的に市販された低温殺菌牛乳である「木次パステライズ牛乳」。発売当時のままのパッケージで販売されている。

